

❖早逝した愛孫の遺詠を
かき集めた追憶の書
北村季吟（一六二四）一七〇五）は、源氏物語の注釈書『湖月鈔』の著者として世に知られている。また、戸幕府の初代歌学方に就いた人物でもある。

季吟には大いに可愛がつていた孫がいた。乙部長則（一六七〇～八五）、その人である。母は季吟の長女たま。後に季吟次男・正立の養子になる季任は実弟にあたる。

季吟は自邸で出生した長則を鍾愛し、「忘年のともなひ」と花見や紅葉狩りにも連れ立ち、自ら学問を教え、家風を伝えた。

好み、十四歳の頃には時の左大臣・近衛基熙にその詠歌を褒められたという。ところが、生来虚弱の長則は翌年の秋に胸を病む。季吟は自らの居所である新玉津島神社に長則を呼び寄せて静養させ、薬や鍼灸を施し、慰めに花を活け、香を焚くなど、心を尽くして看病を行った。しかし、甲斐なく、翌貞享二年二月二十八日、長則は夕陽とともに没してしまう。時に長則の遺した十八歳の春であった。

生前、長則は百首歌を奉納したいと病中にも歌を詠もうとしたが、体に障るこ

たこともあり、本懐を遂げられなかつた。それを無念に思う季吟が、遺された長則の和歌をかき集め一書にまとめた歌集が本書である。

長則の和歌六十三首、漢詩七言絶句一首を收め、季吟の序と熊谷立閑の跋を附す。

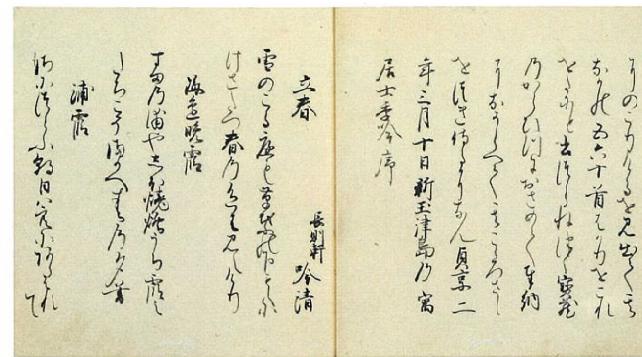
季吟の記した書名「残雪」は本書の巻頭歌「雪のころ庭も草葉の下もえにけたつ春の色は見えけり」による。そして、長則の遺した詠草を春に消え残る雪によそえ、在りし日を惜しむ心を吐露したものでもある。

本書に収める故郷題歌と江亭題詩とを写した季吟の掛軸も別に現存し、亡孫追慕の念を今に伝えている。

（天理図書館 宮川真弥）

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>
○4月の休館日：7日・14日・18日・21日・28日・30日
○本書は今年開催する展覧会「芭蕉の根源—北村季吟生誕四百年によせて—」に出品します。
※最新の情報については公式HP、X（旧Twitter）でご確認ください。

❖早逝した愛孫の遺詠を かき集めた追憶の書 北村季吟（一六二四）一七〇五）は、源氏物語の注釈書『湖月鈔』の著者として世に知られている。また、戸幕府の初代歌学方に就いた人物でもある。



▶【ざんせつ】

乙部長則詠 北村季吟編
貞享2（1685）年写
北村季吟自筆 1冊
縦15.5cm 横15.2cm



残 雪